

和語における「形容詞」と「形容動詞」の区別

——形式と意味との関りを中心に

山 橋 幸 子

1. はじめに

状態や属性を表す語は一般に「形容詞」と呼ばれるが、その品詞の位置づけは言語により異なる。R. M. W. Dixon (1977) によると、中国語のように(自)動詞の下位の分類とする言語もあれば、Hausa 語のように名詞の下位分類と動詞の下位分類にまたがっている言語もある。また、英語等のように名詞とも動詞とも異なる独立した品詞としての「形容詞」として区別されている言語もある。日本語には、所謂「形容詞」(イー形容詞)と「形容動詞」(ナー形容詞)の二種類がある。しかし、これらの品詞全体の中での位置づけは複雑で、今日尚議論の定着を見ていない。品詞の分類基準が学者間で異なるのみならず、形の上での区別が意味の上での区別に関係があるのかという観点からも、意見は分かれている。例えば、A. E. Backhouse (1984) のように、形の上での区別に意味は関わりがないとし、「形容動詞」と「形容詞」の両者を(名詞や動詞とは異なる独立した)同一の品詞と捉える立場がある一方で、上原聡 (2002) のように、「形容動詞」を名詞の下位分類、「形容詞」を動詞の下位分類として両者を形の上で区別し、この区別が意味上の区別にも関係があると主張する立場もある。

本稿の目的は、「形容詞」と「形容動詞」とは形式上区別されているように意味上も区別されていることを主張することにある。形式上の違いが意味上の違いと関わっているという意味で上原の立場と同じであるが、日本語の文法規則の基礎というものに注目している点で異なり、また、形式上の分類基準及び意味上の区分の方法も異なる。具体的には、「形容詞」と「形容動詞」とは時制との結合性において区別され、意味上もこの区別に対応して区別されていることを、Dixon の言語に普遍的な形容詞の意味タイプ (universal semantic

types for adjectives) を参照に論証する。分析の対象は和語の単純語であり、漢語を含む外来語、派生語、複合語等は省く。和語の単純語が日本語の文法規則というものの基礎をなすものであり（森岡健二1994：156－157参照）、また、日本語の語の分類は、まずもってそれらの語に注目して明らかになるという考えに基づく。

本稿の構成は以下の通りである。セクション2で、上原聡の分析に焦点を当てながら、先行研究をまとめ、問題点を指摘する。セクション3で、「形容詞」と「形容動詞」の区別の提案に入る。3.1で、最初に語の分類に関するバックグラウンドを述べてから、両品詞の形式上の区別について述べる。3.2では、Dixonの意味タイプ、更に Backhouseの日本語の「形容詞」の意味分析を概述してから、両品詞の意味上の区別について提案する。セクション4は結びである。

2. 先行研究：上原聡の分析に焦点を当てて

日本語における状態や属性を表す語の品詞論は複雑を極めているが、とりわけ、「形容動詞」（「ナ行形容詞」、「名容詞」（寺村秀夫1982））の場合は複雑で、学者により様々な意見が提案されている。品詞の分類基準の不一致によるものであるが、これらは、「形容詞」との比較において更に、二つの立場に分かれる。一つは、伝統的な学校文法で採用されている立場で、形式上の特徴に重点を置き、「形容動詞」を「形容詞」とは異なる品詞として区別する立場である（時枝誠記、S. Martin、E. H. Jorden 他）。他は、A. E. Backhouse（1984）の主張にあるように意味上の共通性に重点を置き、両者を同一の品詞と捉え、形式上の違いを下位分類の問題と見なす立場であり、最近の日本語教育でも多く採用されている（小矢野哲夫他参照）。しかし、いずれの立場にも共通していることは、「形容詞」も「形容動詞」も属性や状態を表す語として、意味的には両者は同じであると捉えているということである。つまり、「形容詞」と「形容動詞」とは、形式上の違いに関らず、意味上は共通しているというの

*1 例えば、①名詞の下位の分類（時枝誠記1950、S. Martin1975、Eleanor Jorden1987他）；②名詞や動詞とは異なる独立した品詞としての形容詞の下位の分類（A. E. Backhouse1984、小矢野哲夫2005他）；③形容動詞という他の品詞とは異なる独立した品詞（橋本進吉1948、伝統的な学校文法）等がある。

が Backhouse の主張であり、今日の通念である。しかし、日本語の「形容詞」と「形容動詞」との間に見られる形式上の違いは本当に意味上の区別と関りがないのだろうか。現に、上原聡（2002）のように、形式上の区別が意味上の区別と関わっていると主張する立場もある。

<上原聡の形容詞と形容動詞の区別>

上原聡は認知言語学の立場から、日本語の品詞全体のカテゴリー化には、語全体の「活用詞」と「非活用詞」との区別に動機付けされた形態的拘束性が大きく関わっているという考えの下、「動詞」と「名詞」の場合と同様に、「形容詞」と「形容動詞」が語根の形態的拘束性において形式上区別されることを主張する（上原聡2002：85－89参照）。具体的には、「形容動詞は基本形から「だ」を除いたより短い部分（これを語根（lexical root）と呼ぶ）が独立して存在し得るのに対して、形容詞のそれに相当する（基本形式マイナス「い」の）部分は独立性が弱い（拘束性が強い）」ということである（p. 86）」として、以下の例を挙げている（＊は非文を表す）。

（1）形容詞 「あー、＊タカ、＊タカ」「あー、タカイ、タカイ」

形容動詞 「あー、ラク、ラク」「あー、ラクダ、ラクダ」

（同上 p. 86）

つまり、上記の「ラクダ」等のような「形容動詞」の場合は、述語として機能する際に共起する「だ」の拘束性が弱いので、「だ」無しに「あー、ラク、ラク」と言っても容認される。しかし、「タカイ」等のような「形容詞」の場合は、「あー、＊タカ、＊タカ」が容認されないことから分るように、語根が「い」無しに起こることは無く、形態的拘束性が強いということである。この「形容詞」と「形容動詞」との形態的拘束性の差が、意味的な差にも関係しているとして、以下のような結論を出している。即ち、「形容詞」はより基本的で一般的な意味領域を表すのに対し、「形容動詞」は「その意味領域の中の更に特定した意味や特定の背景のもとに使われるニュアンスが加わったものとなっているということである（同上 p. 92)」。つまり、「形容詞」は基本レベルの意味を表すのに対し、「形容動詞」は非基本レベルの意味を表す。従って、例えば、寸法を表す「広い」は基本的な意味を表し、形容詞であるが、この意味に

近似の「廣大」は非基本的な意味を表し、形容動詞である。同様に、評価を表す「いい、悪い」等は基本的な意味を表し「形容詞」であるのに対し、「みごと、結構」等は非基本的な意味を表し「形容動詞」であると説明している。

以上が、「名詞」と「動詞」との二大区分を前提に、カテゴリーの研究にプロトタイプ効果を想定した認知言語学的観点からの上原の分析の概要である。確かに、「形容詞」と「形容動詞」という形式上異なる品詞が、属性や状態という上位のレベルでは同じでも、下位のレベルでは両者間に意味上の違いがあるという意味で理解できる。また、意味上の区別のみに着眼し、「廣大、結構」等の漢語や「真っ赤、真っ暗」等の派生語を含んで考えると、上原の主張も一つの見方だと言える。しかし、何故、「名詞」と「動詞」という主要品詞の意味を区別する形態的拘束性が、下位分類としてそれぞれに属している「形容詞」と「形容動詞」の意味区分にまで適用されるのであろうか（上原2002：87、Uehara1998：ch.2参照）。つまり、「名詞」と「動詞」という形態的拘束性に基づく区別が、（認知言語学及び上原の言葉を借りると）「ものごと」対「関係概念」とに意味上区別されるのなら（上原2002：88）、何故、その同じ基準で、共に「関係概念」を表す「形容動詞」と「形容詞」が意味上区分されるのか、つまり、何故、拘束性の強い「形容詞」が関係概念の基本レベルの意味を表し、拘束性の弱い「形容動詞」が同じく関係概念の非基本レベルの意味を表すのか、疑問が残る。これでは形態的拘束性が「ものごと」と「関係概念」を区別する意義そのものが曖昧になる。また、既述のように上原の分析には漢語や派生語も含まれている。本稿は、日本語の文法規則の基礎というものを念頭に、和語系の単純語に焦点を当て、「形容詞」と「形容動詞」の区別における形式と意味との関わりを考察する。

3. 「形容詞」と「形容動詞」の区別

3.1. 「形容詞」と「形容動詞」の形式上の区別

3.1.1. バックグラウンド

「形容詞」と「形容動詞」との形式上の区別に当たり、バックグラウンドを最初に述べる。品詞を分類する上で、日本語の品詞全体に関わる基本的な分類基準が必要であるが、Susan Steele（1988）によると、語の分類は語基（語の土台となる有意味の音素レベルにおける最小の形態素）の閉じたクラスの形態素

との関わりに基づく形態論的特徴により区分される。日本語の場合は、主格を表す接辞形態素と時制を表す接辞形態素とにより区別される（詳細は山橋2009参照）。実際、主要品詞とされる所謂「名詞」と「動詞」との区分は、形態論的には、主格を表す「ーが」及び時制を表す「ーる（現在）・ーた（過去）」との結合性において一般に区別されている。つまり、「名詞」は主格を表す「ーが」と結合可能であるが、時制を表す「ーる（現在）・ーた（過去）」とは結合しない。従って、例えば、「花」の場合は「ーが」と結合した「花ーが」は容認されるが、時制と結合した「*花ーる／*花ーた」は容認されない。一方、「動詞」は主格を表す「ーが」とは結合しないが、時制を表す「ーる（現在）・ーた（過去）」とは結合する。実際、「見ーる／見ーた」は容認されるが「*見ーが」は容認されない。形式上のこの区別は、文法的には「名詞」はそのままで主語になるが、「動詞」はならず、「名詞」はそのままで述語にならないが、「動詞」はなるものとして区別されている。また、意味上は、「名詞」は持続的に存在し時間の流れと関わらない「花、本」等の「具体物」を指示するが、動詞は瞬間的、一時的に存在し時間の流れと関わる「走る」等の「動き」を指示するものとして区別されている。^{*2}この「名詞」と「動詞」とを形式上区別している基準は、「形容詞」と「形容動詞」との区別にも適用される。つまり、「形容詞」と「形容動詞」も、時制を表す形態素及び主格を表す形態素との結合性において形式上区別される。以下、形式上の区別の具体的提案に入るが、その前に、目的の分析と関わる主格と時制の接辞について明らかにする。

日本語の主格を表す形態素は「ーが」のみであるが、時制を表す形態素は二種類ある。所謂「動詞」に結合する「ーる（現在）・ーた（過去）」と「形容詞」に結合する「ーい（現在）・ーかった（過去）」である。但し、下記に示すように「形容動詞」や「名詞」と結合する「ーだ・ーだった」も時制を表すという立場（寺村秀夫1982、Yoko M. McClain 1981）もある。^{*3}

*2 但し、所謂「名詞」と「動詞」の全てがこのように区別されるわけではなく、「さび」等のように主格の「ーが」とも時制の「ーる（現在）・ーた（過去）」とも結合する語もある。つまり、日本語には「名詞」と「動詞」との二大区分とは対立する第三の語類（品詞）がある。その意味的特徴等詳細は山橋2009参照。

*3 尚、寺村秀夫に関しては実際に表記されている語基（寺村の「語幹」）及び、現在形の'da'、過去形の'datta'を基に、本稿の目的に合わせ（2）のように分析し、表記した。

| (2) | 語基 (「語幹」 stem) | 接辞 (suffix) |
|-----------------|----------------|-------------------|
| 寺村 (p. 54) | <i>d-</i> | <i>-a</i> (現在) |
| | <i>d-</i> | <i>-atta</i> (過去) |
| McClain (p. 15) | <i>da</i> | <i>---</i> (現在) |
| | <i>dat</i> | <i>-ta</i> (過去) |

上記(2)の分析は非常に、不規則で例外的である。寺村秀夫は子音の音素‘d-’のみを有意味の語基と捉え、それと共に音節「だ」を構成する要素としての‘-a’を現在を表す時制とし、‘-atta’を過去を表す時制としている。一方、Y. McClainの分析では現在形と過去形とではそれぞれ語基(McClainの‘stem’)が異なり、前者は‘da’であり、後者は‘dat’である。更に、過去の時制を表すとされる‘-ta’は、所謂「動詞」の過去の時制‘-ta’とは同一視できない。‘-ta’に対応する現在形が動詞の場合は「ーる」であるのに対し、この場合は形態素がゼロで、何も無い。本稿はこれらの立場とは異なり、「ーだ・ーだった」には、英語の“shall”・“should”等の場合のように、語自体に本来的に時制が備わっており、時制を表すこと自体を機能としているわけではないと考える(S. Yamahashi 1988参照)。「ーだ・ーだった」の本来の機能は「断定」を表すことであり、従って、疑問文や推量の文では、下記の例文に示されているように「ーだ」は容認されない。

(3) 山田さんは部長か(*部長だか)

(4) 花子はあの店の店員らしい(*店員だらしい)

従って、注目の「形容詞」及び「形容動詞」の区別と関わる時制は「ーい(現在)・ーかった(過去)」のみとなる。

3.1.2. 「形容詞」と「形容動詞」の形式上の違い

上に主格を表す「ーが」と時制を表す「ーい(現在)・ーかった(過去)」が「形容詞」と「形容動詞」とを区別することを述べた。従って、「形容詞」と「形容動詞」は以下のように形式上区別される: 「形容詞」は語基が主格を表す「ーが」とは結合しないが、時制を表す「ーい・ーかった」とは結合可能である; 一方、「形容動詞」は語基が主格を表す「ーが」と結合せず、また、

時制を表す「ーい・ーかった」とも結合しない。つまり、「形容詞」は、「動詞」のように時制の接辞と結合するが主格の接辞とは結合せず、形式上、「動詞」の下位区分に属する語ということになる。一方、「形容動詞」は「名詞」と同様に時制の接辞とは結合しない。しかし、「名詞」とは異なり、主格の接辞とも結合しない。換言すると、「形容動詞」は形式上、「動詞」とも「名詞」とも区別される独立した語群に属する語ということになる。但し、本稿の目的である「形容詞」と「形容動詞」との比較に着眼すると、両者の違いは、時制との結合性の有無で区別されることになる。実際、「形容詞」の「さむーい・さむーかった」は容認されるが、形容動詞の「*真面目ーい・*真面目ーかった」は容認されない。

3.2. 「形容詞」と「形容動詞」との意味上の区別

3.2.1. メンバーを定めるに当たり

「形容詞」と「形容動詞」との意味上の区別を考察するに当たり、そのメンバーを定める必要がある。上に「形容詞」は主格の「ーが」とは結合しないが、時制の「ーい・ーかった」と結合し、「形容動詞」は主格の「ーが」とも時制の「ーい・ーかった」とも結合しないことを述べた。「ーい・ーかった」と結合する「形容詞」は、基本的には閉じたクラスであり、和語のみから構成されている(Dixon1977:48、上原2002:95他参照)ので、メンバーを判定するのはそう難しくない。しかし、「形容動詞」の場合は容易ではない。実際、副詞「少し」も「形容動詞」のように、主格の「ーが」とも時制の「ーい・ーかった」とも結合しない。また、「きれい、広大、結構・ウェット、クール、ロマンチック」等数多くの漢語・外来語を含むのみならず、「色々」等の置語、「静ーか、我ーまま、ゆるーやか」等の派生語、複合語が多く、注目の和語系の単純語(語基)は非常に少ないとされている(森岡健二1994:176参照)。更に、中には「わずか、かなり」等「形容動詞」のように「名詞」の前で「ーな」と共起し(わずかーな(金)、かなりーな(金額))、述語として「ーだ・ーだった」と共起する(わずかーだ、かなりーだ)語も存在する。本稿は、意味的に程度を表すものは「副詞」として「形容動詞」から省く(鈴木重幸1996参照)。結局、意味的には、ものの属性や状態を表すもので、形式的には主格の「ーが」とも時制の「ーい・ーかった」とも結合しないもののの中から、「ーな」と結合して連体修飾語になり、かつ、「ーだ・ーだった」と結合して述語になるもの

の中から、現代使われている和語系の単純語を考察の対象として抽出した。その方法として、西尾寅弥・宮島達夫著『国立国語研究所資料集7 動詞・形容詞問題語用例集』の「形容動詞（和語）」のリスト（p. 267）を基にして、「形容動詞」の各語の語法のチェックに『岩波国語辞典 第六版』を参照し、和語と漢語の区別に『新選国語辞典 第八版』を参照にした。

3. 2. 2. Dixon の意味タイプと Backhouse の分析

既述のように「形容詞」と「形容動詞」は、ものの属性や状態という上位レベルにおいては共通している。しかし、下位のレベルに注目すると、形式上区別されているように意味上も区別されている。R. M. W. Dixon (1977) は、多言語における形容詞類の対照研究を行い、言語に普遍的な形容詞の意味タイプ (seven universal semantic types for adjectives) として、以下の七つを挙げている：①DIMENSION（長さ、幅、厚さなどの物が空間に締める「寸法」）②PHYSICAL PROPERTY（重い、熱いなどの「物体の性質」）③SPEED（早い、遅いなどの「速度」）④AGE（「年齢」）⑤COLOUR（「色」）⑥VALUE（よい、悪いなどの「評価」）⑦HUMAN PROPENSITY（「感覚・感情」feeling、「人の性格」human character、「人の性癖」human propensity等を全て含む「人の性癖」）。このDixonの意味タイプを基にBackhouse (1984) は、日本語の「形容詞」と「形容動詞」とを分析し、形式上の区別には意味的な動機付けはなく、英語等の adjective の場合と同様に、「名詞」とも「動詞」とも異なる独立した一つの品詞を構成していると主張する。つまり、「形容詞」と「形容動詞」では、Dixonの七つの意味タイプに属する語に違いがあり、また数の多少において違いはあるが、しかし、例えば、Value「評価」を表す語は「いい」と「だめ」のように反意語のペアとしてそれぞれ「形容詞」と「形容動詞」とに属し、また、「うまい」と「上手」のように同意語のペアもそれぞれ両品詞に属しており、両者には意味的に区別する動機付けはないということである。しかし、Backhouseの分析には、漢語や派生語も含まれている。現に「いい」の反意語としてペアをなす「だめ」は漢語であり、「うまい」と同意語の「上手」も漢語である。また、「黒い」のように「色」を表す語として挙げている「真っ黒」は派生語である。更に、「感覚・感情」、「人の性格」、「人の性癖」を全て一括してHUMAN PROPENSITY「人の性癖」としている。本稿は日本語の文法規則の基礎をなす和語系の単純語に焦点を絞り、更に、

HUMAN PROPENSITY「人の性癖」を時間との関わりという観点から human character「人の性格」とそれ以外（即ち、feeling「感覚・感情」と human propensity「性癖そのもの」）とに区別できることに着目して「形容詞」と「形容動詞」との意味を考察していく。

3.2.3. 「形容詞」と「形容動詞」との意味上の違い

最初に、「形容詞」の意味タイプに関して考察する。HUMAN PROPENSITY「人の性癖」に含まれている human character「人の性格」を別にすると、Backhouse の考察通り、Dixon の挙げる七つの意味タイプ全てに「形容詞」が属していることが分る。下記の（５）は意味タイプ別の例を挙げたものである。

（５）「形容詞」の意味領域

① DIMENSION「寸法」

長い、短い、大きい、小さい、広い、狭い、、、

② PHYSICAL PROPERTY「物体の性質」

重い、軽い、熱い、冷たい、硬い、柔らかい、、、

③ SPEED「速度」

早い、遅い、とろい、のろい

④ AGEの「年齢」

若い、幼い、（「年取った」は動詞）

⑤ COLOUR「色」

赤い、青い、黒い、白い

⑥ VALUE「評価」

よい、悪い、まずい、おいしい、うまい、難しい、ひどい、、、

⑦ HUMAN PROPENSITY「人の性癖」

・（human character「人の性格」）

（賢い、ずるい、、）

・ feeling「感覚・感情」

嬉しい、悲しい、恥ずかしい、うらやましい、寂しい、悔しい、、、

・ human propensity「性癖そのもの」

きびしい、むごい、賢い、ずるい、めめしい、、、

一方、「形容動詞」の意味領域は非常に限られている。「形容動詞」の大多数が human character「人の性格」を指示しており、「形容動詞」に特有な意味となっている。また、「人の性格」のように多くはないが、VALUE「評価」を指示する語もある。他には、emotional feeling「感情」や PHYSICAL PROPERTY「物体の性質」を表す語がごく少数であるが存在する。下記は意味タイプ別の例である。

(6)「形容動詞」の意味領域

① human character「人の性格」

内気、真面目、かたくな、やんちゃ、ほがらか、せっかち、素直、…

② VALUE「評価」

見事、まとも、ちゃち、でたらめ、とんちんかん、…

③ emotional feeling「感情」

好き、嫌い

④ PHYSICAL PROPERTY「物体の性質」

平ら、いびつ

最初に、「形動動詞」に特有の human character「人の性格」(Dixon では HUMAN PROPENSITY「人の性癖」に含まれる)であるが、これは「人の属性」である。しかし、行為や状態等の属性のように、瞬間的、偶然的な存在ではなく、その存在が時間の流れと共に容易に変化するものではない。「三つ子の魂百までも」と言われるように、普通はその人の誕生あるいは幼時以来持続的に存在するものであり、基本的に一生変わらない。つまり、「その人」が存在するということは「その性格」が存在することを意味するということである。その意味で、「性格」の存在は時間的に継続して存在する「もの」と同じである。しかし、「性格」は「もの」ではない。こういう特徴を持つ意味を、時制とも主格の接辞とも結合することのない「形容動詞」だけが指示している。(5) ⑦に示されているように、「形容詞」の「賢い、ずるい」等も「人の性格」を表すが、これらは、「人の性格」のみではなく、「賢い犬」「ずるい狐」のように動物にも用いられ、また、同時に、「賢い／ずるいやりかた」のように一時的存在である行為にも用いられる。その意味で、「人の性格」のみを表す「形容動詞」とは区別される。次に VALUE「評価」であるが、これを表す語

は(5)⑥にも示されているように「おいしい、難しい」等「形容詞」にも存在する。しかし、両者は「人の性格」に見られる時間的持続性において区別される。つまり、「この作品は見事だ」のように用いられる「形容動詞」「見事」の意味は、時間を掛けた様々な角度から総合的に考察した結果としての「評価」であり、その評価は普通持続する。今日、「見事」と言われた作品の評価が、翌日容易に変わるものではない。しかし、「形容詞」の表す評価は違う。例えば、「このケーキはおいしい」等のように用いられる形容詞「おいしい」は、目の前にあるケーキそのもののその瞬間における評価であり、翌日には時間の経過とともに味が落ちて「このケーキはおいしくない」という評価に変わりうるものである。つまり、同じ評価でも時制を表す接辞と結合しない「形容動詞」のそれと、時制と結合する「形容詞」のそれとの間には、持続性という観点から違いがあるということである。次に、「好き、嫌い」という「形容動詞」であるが、これらは emotional feeling「感情」を表す。同様に「形容詞」にもこの意味を表す語が存在する。しかし、「恥ずかしい、悲しい、嬉しい、悔しい」等の「形容詞」は、その場における一時的、瞬間的な感情を表すのに対し、「形容動詞」の「好き、嫌い」は、心の中に持続して潜在している。ここでも、時制の接辞とは結合しない「形容動詞」が、時制と結合する「形容詞」と形式上区別されているように、意味的にも、一時的か持続的かで区別されていると言える。最後に、「平ら、いびつ」という PHYSICAL PROPERTY「物体の性質」を表す語であるが、和語の単純語に限るとこの二語のみである。これらは、「形容詞」の「広い、狭い、長い、短い、重い、軽い」等とは異なり一時的なものではなく、他との比較において変わるものでもない。例えば、「重い」ものも他と比べれば「軽く」なり得る。一方、「平ら」や「いびつ」は他との比較で変わるものではなく、「平ら」は「平ら」であり、「いびつ」は「いびつ」である。従って、上記の意味タイプの場合と同様に、やはり、存在の持続性において区別されていると言える。

以上、Dixon の意味タイプを参照に「形容詞」と「形容動詞」との間には、意味の上で明らかに違いがあることを述べた。時制と結合しない「形容動詞」は、人の存在と共に存在する「人の性格」を表す語が大多数を占めている。また、「評価」を始めとして、「感情」や「物体の性質」等も、「形容詞」の場合とは区別される持続的に存在するものを表す。一方、時制と結合する「形容詞」は、「人の性格」以外の全ての意味タイプに分布している。しかし、「形容動詞」

と共通する意味分野では、上記のように持続性という点において区別されている。また、「形容動詞」にはない「大きい、長い、短い」等の DIMENSION「寸法」、「早い、遅い」等の SPEED「速度」、「若い、幼い」等の AGE「年齢」も、また、「厳しい、むごい」等の human propensity「性癖そのもの」に関しても、基本的にはその場における一時的状態であり、判断であると言える。色に関しては、例えば「茶色い、黄色い」等は複合語であり、また大多数の色は「紫、緑」等の「名詞」や「ピンク」等の外来語によって表される。和語の単純語では、「赤い、青い、黒い、白い」の四つの「形容詞」があるのみである。これらの「形容詞」は「苺はもう赤い／まだ青い」等のように、その時のものの状態を表す。つまり、一時的な状態と関わっている。このように、全体として、「形容詞」と「形容動詞」とは時制との結合性において、形式上区別されているように、意味上も時間と関わる持続性において区別されていると言える。つまり、所謂「名詞」と「動詞」との典型的な意味上の区別、即ち、「もの」と「動き」との区別が、時間の流れという観点からは持続性において区別されるのと同様に、「形容詞」と「形容動詞」も持続的な存在か否かで意味上区別されているということである。

4. 結び

本稿は、「形容詞」と「形容動詞」とが時制との結合性において形式上区別されていることを基に、意味との関わりを、和語系の単純語に焦点を当てて考察した。そして、両品詞が形式上区別されているように、意味上もその形式上の区別に対応して区別されていることを、Dixon の adjective の意味タイプを基に述べた。つまり、時制に基づく形式上の両者の違いは、存在の持続性とい

*4 しばしば「形容詞」と「形容動詞」の両品詞と関わりとされる「大きい、大きな」「小さい、小さな」「暖かい、暖かな」等の語があるが、本稿の基準では、前者は主格の「ーが」及び時制の「ーい・ーかった」との結合性という観点から、DIMENSION「寸法」を表す「形容詞」である。また、後者の「大きな」等は『大辞林第二版』によると前者の「大きい」と歴史的に関連性があるとしているが、しかし、共時的観点からは、アクセントパターンが異なり（『新明解 日本語アクセント辞典』参照）、「形容詞」とは別の形態素である。また、これらは「静かーな」のように「ーな」の付いた派生語としても捉えられると言う意味でも本稿の考察対象から外される。更に、「大きな、小さな」等は連体修飾語としては用いられるが、「だ」と共に述語として用いられることはなく、「形容動詞」として捉えるべきか否か、品詞の位置付けも問題である。

う意味特徴に動機付けられているということを主張した。形式上の区別は意味上の区別に関係があるのである。本稿の分析が、品詞分類、とりわけ「形容動詞」の問題解決に一つの手がかりとなれば幸いである。

参考文献

- Uehara, Satoshi (1998) *Syntactic Categories in Japanese: A Cognitive and Typological Introduction*. Kuroshio.
- 上原聡 (2002) 「日本語における語彙のカテゴリカについて：形容詞と形容動詞の差について」大堀 寿夫 (編)『認知言語学 II：カテゴリー化』東京大学出版会 Pp. 81-103.
- 金田一京助、佐伯梅友、大石初太郎、野村雅昭 (編) (2002)『新選国語辞典 第八版』小学館.
- 金田一春彦監修 (2006)『新明解 日本語アクセント辞典』三省堂.
- 小矢野哲夫 (2005)「形容詞」日本語教育学会 (編)『新版日本語教育事典』大修館書店 pp. 83-85
- 鈴木重幸 (1996)『形態論・序説』むぎ書房.
- Steele, Susan (1988) "Lexical categories and the Luiseño absolutive: Another perspective on the universality of "noun" and "verb"", *International Journal of American Linguistics*, pp. 1-27.
- Jorden, Eleanor H. (1987) *Japanese: the spoken language*, Yale University Press.
- Dixon, R. M. W. (1977) "Where have all the adjectives gone?", *Studies in Language* 1, 19-80.
- 寺村秀夫 (1981)『日本語のシンタックスと意味』くろしお出版.
- 時枝誠記 (1950)『日本文法 口語編』岩波書店.
- 西尾寅弥、宮島達夫 (1972)『国立国語研究所資料集 7 動詞・形容詞問題用語例集』秀英出版.
- 西尾実、岩淵悦太郎、水谷静夫 (編) (2000)『岩波国語辞典 第六版』岩波書店.
- Backhouse, A. E. (1984) "Have All the Adjectives Gone?", *Lingua* 62, pp.169-186.
- 橋本進吉 (1948)『国語法研究』岩波書店.
- McClain, Yoko M. (1981) *Handbook of modern Japanese grammar*, Hokuseidoo

Press.

Martin, Samuel E. (1975) *A reference grammar of Japanese*, Yale University Press.

松村明（編）（1995）『大辞林 第二版』三省堂.

森岡健二（1994）『日本文法体系論』明治書院.

Yamashita, Sachiko (1988) *Resolving the problem of Japanese no: An analysis of words*. University of Arizona Ph. D. dissertation.

山橋幸子（2009）「転成名詞の別の見方」札幌大学総合論叢 第27号 札幌大学 pp. 97－110.